

## 近世日本における天皇権威の浮上の理由

前田 勉

### 一

かつて津田左右吉は、「国学者は神道者に三本毛の多いまでのもの」（『癪癖談』）という上田秋成の言葉を引照しながら、「自國本位主義」に関していえば、「国学者たゞ神道の繼承者にすぎない」と論じた（『文学に現はれたる我が国民思想の研究』平民文学の時代 第二篇 第十五章）。

この神道から国学への繼承というストーリーのなかで中心となるものは、言うまでもなく、「自國本位主義」の論拠となつた万世一家の天皇である。戦前の皇国史觀は、この点を殊更に強調した。そこでは、天皇の実質的な権力は徳川幕府の巧妙な

朝廷対策によつて骨抜きにされていたが、にもかかわらず、日本固有の「国体觀念」は一部の先覚者たちによつて自覺され、徐々に尊皇心が高まつていつて、明治維新の王政復古にいたるのだととらえられた。垂加神道家と国学者は、そうしたもともとはあつたはずの、見失われてしまった「国體觀念」を再生しようとした先覚者として位置づけられ称揚された。

もちろん、こうした万邦無比の「国体觀念」が近代日本の「創造された伝統」であることは明白である。その虚構性を暴露することは大事な仕事だが、それだけで、万事すむわけではない。というのは、どう評価するかは別にして、たしかに直接には権力とはかかわらない垂加神道家や国学

者たちの間から、京都の天皇にたいする崇拜心が生まれて

いったからである。この歴史的な事實を「國体觀念」の自覺という枠組みとは異なる方法で、どのようにとらえればよいのであろうか。この問題で示唆を与えるのが、エスノ・ナショナリズムの類型を説いているアンソニー・スマスの次のような仮説である。スマスによれば、ナショナリズムは知識人のアイデンティティの危機に対する解決策であるという。「多くの知識人にとってのナショナリズムの魅力をどのように説明したらよいのであろうか。ナショナリズムは知識人の「アイデンティティの危機」にたいする解決策だとのべるのがもつとも一般的な命題であり、この命題が適切に公式化されるならば、そこには重要な真実があるといえよう」（『ナショナリズムの生命力』高柳先男訳）。このスマスの示唆から、近世日本の天皇が浮上してくる理由をとらえることはできないだろうか。たとえば、かつて平泉澄が『伝統』という著作のなかで、「眞の日本人」として賞賛した幕末の平田門下で、桜田門外の変に関連したかどで獄死した佐久良東雄（一八二一～六〇）は、次のような歌を残している。

世の人はなに、心をなぐさめてあかしくらして生きて  
あるらむ

かりけり

東雄によれば、「世の人」は「何のためにと生れきしもの」かも明言できずにいる。これにたいして、東雄にとっての生きる意味＝「世に生けるしるし」が「現人神」天皇への忠誠であった。

うつせみの人と生れ出で、明日しらぬもろきこの身を、  
ふたゆかぬこの年月を、いかならむことをなしてか、  
世に生けるしはあらむ。朝夕に勇しからむ、土食  
みてうゑは死ぬとも、かしきや今のうつゝに、あめつ  
ちにいてりとほらす、天照らす日の皇子わが大王に、  
たぐひなき赤き心を一筋につくしてこそと、ますらを  
の心ぶりおこし（上京の歌）

土食ひて餓ゑは死ぬとも、穢きやつこにこびず、現身  
の身をけがさずて、現神わが大王に、比ひなき赤き心  
を、一筋に仕へ奉りて靈尅タマキハル命し死なば、美しき愛し  
き吾が子と、大己貴神のみことの、畏きや珍の御手も  
て、撫でたまふべき。（無題）

「現神」天皇への「一筋」の忠誠は、死後、「美しき愛しき吾が子」と「大己貴神のみこと」によつて慰撫される。この歌には、篤胤の幽冥觀がふまえられているのだが、つまらない私も、「美しき愛しき吾が子」のなかで不死でいられるのだ！ この確信が東雄をつき動かしていたことは

間違いない。本発表では、このような東雄のいう「世に生けるし」として「現人神」天皇が登場してくる、その過程を垂加神道から国学への発展のなかでとらえてみたい。

## 二

まず、近世の天皇浮上という問題で画期的な意義をもつ垂加神道の登場の前史として、本発表では、近世前期の儒仏論争に注目しておきたい。それは、『本朝神社考』などを著した林羅山が朱子学の気の聚散説にもとづいて、仏教の三世因果や輪廻転生説を虚妄であると批判したことによつて、近世の天皇浮上といつては、この批判にたいして仏教側の激しい反論が

を発していた。

この批判にたいして仏教側の激しい反論が発され、両者の間で靈魂の滅不滅、勸善懲惡の教説としての有効性、あるいは中華思想などの論点をめぐつて戦われ、仮名草子のような通俗的な教訓書にまで題材となつた、一連の論争である。しかし、この論争は最終的な決着をみずには、仏教と儒教との間で、どちらとも態度を決めかね、宇宙を神に祀りあげ、封じ込めた奇妙な生祀という行為に起源をもち、そうした神としての靈魂＝「靈社」になるために、「現人神」天皇への忠誠を求めた教説である。垂加神道を集大成した玉木正英（一六七〇—一七三六）は、次のように言つてゐる。「トカク日本ニ生レタカラハ、善惡ノ別ナシニ朝家ヲ守護シ、ヲホヒ守ルト云コトヲ立カビヤリ、以朝家ノ埋草トモナリ、神ニナリタラバ、内侍所ノ石ノ苦ニナリトモナリテ、守護ノ神ノ末座ニ加ハルヤウニト云コトカ、コノ伝ノ至極也」（『玉木翁神籬口授』）。この正英をうけて、若林強齋は「志をたつるといふても、此五尺のから

及ばず。儒の心魂散滅は、一向に高遠にして納得せず。儒にもよらず、仏にもよらず、両極にただよふものあり」（『神國増穂草』卷下）。

こうした近世前期の儒仏論争の流れのなかでいえば、垂加神道は、儒教でも仏教でもない、「われわれ日本人」の死後の安心論を提起した点で画期的な意義をもつていた。すなわち、朱子学のように「形朽滅、神飄散、泯然無跡」（『小学』外篇、広明倫）と割り切つて、死後は無だとするわけでもなく、かと言つて、僧侶が地獄絵図などを使つて勧化する因果応報説でもない、新たな死後の安心論を提出したのである。

それは、もともと山崎闇斎が生きているうちに自己の靈魂を神に祀りあげ、封じ込めた奇妙な生祀という行為に起源をもち、そうした神としての靈魂＝「靈社」になるために、「現人神」天皇への忠誠を求めた教説である。垂加神道を集大成した玉木正英（一六七〇—一七三六）は、次のように言つてゐる。「トカク日本ニ生レタカラハ、善惡ノ別ナシニ朝家ヲ守護シ、ヲホヒ守ルト云コトヲ立カビヤリ、以朝家ノ埋草トモナリ、神ニナリタラバ、内侍所ノ石ノ苦ニナリトモナリテ、守護ノ神ノ末座ニ加ハルヤウニト云コトカ、コノ伝ノ至極也」（『玉木翁神籬口授』）。この正英をうけて、若林強齋は「志をたつるといふても、此五尺のから

だのつづく間のみではなひ、形氣は衰へうが斃うが、あの天の神より下し賜はる御玉を、どこまでも忠孝の御玉と守り立て、天の神に復命して、八百万の神の下座に列り、君上を護り守り、國家を鎮むる靈神と成に至るまでと、ずんと立とをする事なり」（『神道大意』）と説き、また吉見幸和も「所謂る日本魂にして念々忘れざれば、則ち身不肖と雖も、宜しく八百万の神の末席に列るべし。然らざれば、則ち死して消滅するのみ」（『国学弁疑』卷二〇、日少宮弁）と説いてい る。

こうした天皇を守護して、死後に自分も「八百万の神の下座に列」るという垂加神道の救済論が、自覺的に仏教や儒教に対抗して打ち立てられたものであつたことは、垂加神道を通俗的に広めていつた伴部安崇の『神道野中の清水』（享保一八年刊）のなかの一節、「儒道も仏道も生死に至ては、神道とは別段の事にて、儒道仏道は此國の為にならぬといふ説」によく示されている。仏教や儒教を信じたり、学んだりすることは「此國の人」ではない。「尊き人はもとよりの事、いやしき者とても此國に生れ」た限り、「此國守護の神靈」となることを志さねばならないという（『神道野中の清水』卷四）。こうした主張は、近世前期の儒仏論争において未解決のまま残された死後の問題を、死後に神靈になることが日本の神道だと説いて、一举に止揚するもので

あつたといえよう。つまり、仏教と儒教のふたつの普遍宗教の間でふらふらしていた知識人に、そのどちらとも異なる生死觀を提示し、「先ヒモロキイハサカ伝ハ、今日日本人ユヘ、唐ニドノヤウナヨヒコトアリテモ、ソレヲ用ヒズ、無理云テモカツコトジャト云タマシイニ成タ人デナケレバ伝ヘヌ」（松岡雄淵筆記『玉木翁神籬口授』）という、「日本魂」というナショナル・アイデンティティを提供し、垂加神道は近世思想界に登場したのである。

思うにこうした垂加神道の救済論は、その主な受容層であつた公家・神官が觀念の世界のなかで、地位の逆転を求めるものであつたことは注目すべきである。周知のように、近世国家にあつては、彼らは官位こそ高いかもしけないが、実質的な権力を奪われていた。その彼らが、「現人神」であるにもかかわらず、慘めな地位にいる天皇に自己を同化させ、その天皇への忠誠によつて、「身不肖と雖も、宜しく八百万の神の末席」に列なることができるのだと、觀念の世界のなかでの地位の逆転をはかつたものだといえよう。

ただし垂加神道のなかには、ひとつの問題がはらまれていた。それは、「日本魂」を保持し、死後に「八百万の神の下座」に列なるという、このつまらない「不肖」の身に生きる意味を付与する、その前提となる天皇が「現人神」

であるという信仰 자체にあった。たとえば、「現人神」天皇について、宝暦事件の首謀者竹内式部は次のように言う。「代々の帝より今の大君に至るまで、人間の種ならず、天照大神の御末なれば、直に神様と押し奉つり、御位に即かせ給ふも、天の日を繼ぐといふことにて、天津日繼といひ、又宮つかへし人を雲のうへ人といひ、都を天といひて、四方の国、東国よりも西国よりも京へは登るといへり」（『奉公心得書』、宝暦七年）。

今、ここにいる生身の天皇を「直に神様と押し奉る」とことは、「とかく浮世は金の世」（『人鏡論』、貞享四年刊）で「錢」だけが確かなものとされる太平の時代、「後世やら現世やらうつらうつら」（これは増穂残口の言葉）に生きている人々にとって、そうたやすいことではないだろう。殊に玉木正英の次の世代の松岡雄淵にいたっては、「第令儒生糸徒異端殊道の頑、村町野夫、賈販奴隸の愚だも、

悃悃款款として國祚の永命を祈り、紫極の靖鎮を護る者、これこれを日本魂と謂ふ」（『神道學則日本魂』、享保八年刊）とあるように、天皇を「護る」「日本魂」をもつ「臣民」の範囲が、村の農民や商人にまで拡大していつたとき、それを信じさせることの難しさは増したであろう。こうした生身の天皇を「直に神様と押し奉る」という突飛な観念は、天壤無窮の神勅にもとづく永遠不滅の「国体」を自觉されすれば、「日本人」であるならば自ずからわき出るといつ

たものではなかろう。それは、五十余年前の尊皇論者からすれば当然のことであつたかもしれないが、現代のわれわれにとつてはそうたやすいものではなく、一八世紀前半に生きた人々においても同様であつたろう。それはともかくも、垂加神道では、こうした観念をどのように人々に喚起していたのだろうか。

思うに垂加神道において、こうした生身の天皇を「直に神様と押し奉る」不可思議な信仰を喚起し、それを保証していた装置が秘伝であつた。垂加神道の最高の秘伝、神籬伝は学習の最後の段階に達した者のみが伝授されたもので、天孫降臨の際、天児屋命にくだされた「ヒモロギ」は「日守木」を意味し、太陽・天照大神と一体の「現人神」天皇を守護することが「皇天二祖」の勅命としてくだされたのだとする内容であつた。それは、土<sup>ト</sup>が締まつていつて、金<sup>カネ</sup>となるように、「敬」すなわち「つつしみ」を重んじなくてはならないという「土金伝」、「清明本心」であるとき來格する「形を現し玉ひ、有かとすれば忽なく、目恥くして見定難」（『玉籣集』卷四）神を身近に感じることのできるようになる「菊理媛之伝」や「虚空彦之伝」、あるいは三種の神器のなかに天照大神が自己の靈魂を封じ込めたという「三種神宝極秘伝」のような荒唐無稽ともいえる秘伝の段階を、ひとつずつ生真面目に習得してきた者だけに許され

た最高の極秘伝であった。さらには玉木正英の橋家神道においては、「産屋墓目射之事」「反死月延事」「棟越墓目之事」「狐付墓目之事」「雨墓目之事」「妖怪出現墓目之事」「朝敵征伐之事」「調伏墓目之事」「雨夜  
墓目之事」「雷上動弓之事」「邪祟墓目之事」「小兒夜鳴止事」「祈雨止  
病卷」)といつた、弓矢の「ヒヨー」となる音で邪氣を払い、病気を直し、蘇生させる呪術までも含んだ、秘伝を信じきた者だけが、今、現に生きている天皇を「神様」だと実感できるのであり、また、そうした限られた者(エリート)にしか与えられない秘伝という装置があつてはじめて、「現人神」への忠誠によつて神になるのだという信仰も保持されていたのである。たしかに闇斎の直弟子であり、正英の師でもある正親町公通が、「靈社号は、神道伝授の人は誰にても称すべし。靈はみたまに非ずや。人々靈なき者はあらじ」(『正親町公通卿口訣』)と説いていたように、「靈社」すなわち「神」になることは誰にでも理念的には可能であったが、垂加神道においては、現実には、誰もが「神」になれたわけではなかつたのである。

### 三

では、今までのべてきた垂加神道から国学、ことに本居

おいては、「産屋墓目射之事」「反死月延事」「棟越墓目之事」「狐付墓目之事」「雨墓目之事」「妖怪出現墓目之事」「朝敵征伐之事」「調伏墓目之事」「雨夜  
墓目之事」「雷上動弓之事」「邪祟墓目之事」「小兒夜鳴止事」「祈雨止  
病卷」)といつた、弓矢の「ヒヨー」となる音で邪氣を払い、病気を直し、蘇生させる呪術までも含んだ、秘伝を信じきた者だけが、今、現に生きている天皇を「神様」だと実感できるのであり、また、そうした限られた者(エリート)にしか与えられない秘伝という装置があつてはじめて、「現人神」への忠誠によつて神になるのだという信仰も保持されていたのである。たしかに闇斎の直弟子であり、正英の師でもある正親町公通が、「靈社号は、神道伝授の人は誰にても称すべし。靈はみたまに非ずや。人々靈なき者はあらじ」(『正親町公通卿口訣』)と説いていたように、「靈社」すなわち「神」になることは誰にでも理念的には可能であったが、垂加神道においては、現実には、誰もが「神」になれたわけではなかつたのである。

問題は、この宣長によつて再現された「神代」の中心を占めるものもまた「天皇」であつたという点である。この点にかんするかぎり、宣長は垂加神道と等しい。今みてきたように垂加神道もまた、天照大神以来の皇統の一系性を主張し、また天皇を「直に神様と拝し奉」つてはいた。かつて村岡典嗣は、「垂加神道の根本義と本居への関係」(『日本思想史研究』)のなかで、垂加神道の「天日一体の皇祖神天照大神の子孫としての天皇に対する、絶対崇敬の信仰」の宣長への影響を示唆していた。といつて、もちろん上田秋成の評言のように、「国学者は神道者に三本毛の多いまでのもの」とすますわけにはいかない。垂加神道と国学の天皇觀の間には、どこに断絶があるのだろうか。

思うに、それは宣長の秘伝否定にかかわつてゐる。垂加神道では、生身の天皇を「直に神様と拝し奉」る不可思議な信仰は秘伝によつて保証され、嚴選された少數者のみのものであつた。逆に言えば、こうした限られたエリートのものであることによつて、神官・公家の地位の逆転も意味のあるものになつたろう。無制限に誰もが「八百万の神の

「末席」に列なることができたならば、その希少価値はなくなる。しかし一方で、松岡雄淵に見たように、天皇を「護る」「日本魂」をもつ「臣民」の範囲は、村の農民や商人にまで拡大していく方向性をすでに享保期の垂加神道ははらんでいた。思うに宣長は垂加神道にまとわりつく秘伝を否定し、公開された「神典」を根拠にして、この後者の拡大の方向をさらに押し進め、現人神としての天皇の存在を万民ひとりひとりに直接にむすびつけた点で画期的な意義をもつていた。天皇が天照大神の御子として「天つ神の御心を大御心」（直毘靈）とするように、上は将軍から下万民にいたる「しもがしもまで、たゞ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみるやびまつろ」（同右）うことを、宣長は求めたのである。

こうした天皇と「凡人」としての万民の関係を考えるにあたって、注目すべきことは、宣長が、悪神である禍津日神のもたらす不条理な世の中にたいして「せんすべもなく、悲しむ」ことしかできない「凡人」の生と、天皇の存在を結びつけていたことである。詳しくは述べられないが、『直毘靈』には次のような周知の文章がある。

そもそも此ノ天地のあひだに、有りとある事は、悉皆に神の御心なる中に、禍津日神の御心のあらびはしも、せむすべなく、いとも悲しきわざにぞありける。然れ

ども、天照大御神高天原に大坐々て、大御光はいさ、かも疊りまさず、此ノ世を御照しましまし、天津御璽はた、はふれまさず伝はり坐て、事依し賜ひしまにまに天の下は御孫命の所知食て、天津日嗣の高御座は、あめつちのむた、ときはにかきはに動く世なきぞ、此ノ道の靈く奇く、異國の万々の道にすぐれて、正しき高き貴き徵なりける（『直毘靈』）

ここで注目すべきは、禍津日神の「せむすべなく、いとも悲しきわざ」を悲しみとして受けとめつつも、「然れども」と反転して、天壤無窮の神勅にもとづいて、現人神としての天皇の地位は天地とともに永遠であると主張していることである。結論だけ述べれば、宣長においては、天皇は、禍津日神のあらびによつて、善者も必ずしも報われないという「せんすべなく、いとも悲しきわざ」にみちみちいる不条理な世界のなかで、その悲しみに耐えて生きている「凡人」の、いわば希望の光として存在しているのである。垂加神道では、秘伝を媒介にしなければ信じられなかつた「現人神」天皇という奇妙な観念が、宣長においては、不条理な世界に生きる「凡人」の感概と結びつくことによつて信念となつた。言葉をかえていえば、宣長のような世界を不条理なものと感ずる知識人の前に、天皇が秩序の根源として立ち現れたのである。ここに、宣長における天皇

権威浮上の理由があると思われる。そして、一端、万民のひとりひとりの生に結びついた天皇の存在は、平田篤胤の「大倭心の鎮」としての「靈の行方」（『靈能真柱』）を明らかにした幽冥觀によつて、垂加神道の死後に「八百万の神の下座」に列なるという救済論と匹敵するような、確固とした生死觀を付け加え、近世後期から幕末の内憂外患の危機の状況、宣長のような知識人に限らず、だれもが不条理であることを感ぜずにはいられない世界のなかで、大きな力を發揮していくことになる。殊に芳賀登氏の指摘する幕末国学運動のふたつのコース（『幕末国学の展開』）、すなわち生産者農民型コースと草莽崛起の義士的コースのうち、後者のコースの人々に力を發揮したように思える。

そのひとりが冒頭に紹介した平泉澄が「眞の日本人」だと賞賛した、平田門下の佐久良東雄であろう。彼はもともと僧侶であったが還俗して後、生れ故郷常陸の土浦を出奔して江戸に出て、さらに京都に上る。こうした在地から離脱したデラシネである東雄の急進主義をささえたのが、「世の人」は「何のためにと生れきしもの」かも明言できずにいる世界のなかで、生きる意味＝「世に生けるし」としての「現人神」天皇の存在であつた。「大君にまつろふこゝろなき人はなしをたのしと生きてあるらむ」と歌うように、かれにとつて、「現人神」天皇への忠誠こそが、

「何のためにと生れきし」かもわからない「アイデンティティの危機」を克服して、ナショナル・アイデンティティを獲得する行為となつていくのである。

（愛知教育大学助教授）